

# 1.序論

## 1.1. 本論文の対象・目的・概要

### 1.1.1. 本論文の対象と目的

目的語と数・格（・性）において一致する人称代名詞の弱形が同一文中に重複して現れること（以下『目的語重叙』或いは『重叙』）は、バルカン諸言語（標準セルビア語を除く）に定着した現象としてよく知られている。しかもこうした現象は決してバルカン半島の諸言語群にのみ現れるものではなくルーマニア語以外の西ロマンス語にも見られるほか、非印欧語にも多かれ少なかれ類似の現象が存在する。

一見余剰な要素が必須の文成分となるこうした現象がいわゆる「バルカン言語現象」<sup>1</sup>の枠に留まらないでいる事実は、これが言語の本質に関わる現象であることを意味している。

バルカン半島の諸言語における重叙表現の先行研究は 1930 年代まで遡ることができる。ブルガリア語、マケドニア語、ルーマニア語、現代ギリシア語との対照研究がしばしばこの現象に触れており、重叙の歴史的起源をめぐる論争も存在する。1950 年代からはアルバニア及びドイツ語圏で、重叙の体系を明らかにする試みが行なわれてきた。

こうした目的語重叙は統語構造に関連しているだけでなく、談話文法やテキスト言語学の観点からも見ても重要な役割を果たしている。基本的には、目的語がいわゆる「主題」の領域に属する場合、弱形人称代名詞による重叙が生じると説明されることが多い。或いは、目的語が「定（定冠詞または定形語尾を伴う）」であるか「不定」であるかという点だけでなく、談話の構造において「特定」か「非特定」かという点でも決まる。

一方、上に述べた重叙現象は単文にのみ見られるものではない。例えば、関係代名詞が関係節の内部で目的語となっている場合、これに一致する人称代名詞弱形が関係節内に現れることがある。また関係代名詞には、性・数・格によって屈折を生じるものと、全く語尾変化しないものがあるが、

---

<sup>1</sup> 「バルカニズム」全般については本文や他の注で示すものの他、**Андрейчин/ Попов/ Иванов (1954: 240-242)**や**Асенова (1989)**。歴史的研究としては**Благова (1963)**や**Иванов (1965: 227-243)**。またロシア語との関連を論じたものとしては**Ivić (1958)**などがある。

どちらを選択するかによって関係節内の重叙頻度に差が現れることもある。

ただ、重叙表現全般に対する活発な研究が存在する一方で、こうした補文構造<sup>2</sup>における重叙表現に的を絞った記述は少ない。重叙は補文の意味的構造とも密接に関係し、また関係代名詞などの補文標識の選択には意味的差異も考えられる。従ってアルバニア語の重叙表現を研究するにあたっては、補文標識の選択と重叙表現という二つの現象を併せて扱う必要がある。

本論文はこうした問題意識の下に、関係代名詞の選択の基準、人称代名詞による重叙の条件を、意味論だけでなく統語論の観点も踏まえて更に詳しく記述する。またこれらの現象の歴史的・地理的変遷についても調査する。これらを総合し、現代アルバニア語の重叙表現に関する体系的な記述を目指す。

### 1.1.2. 本論文の構成

本論文は大きく3章からなる。

第1章ではアルバニア語における重叙表現について概説する。アルバニア語の一般的な特徴を解説した後、単文における重叙と補文節内における重叙の例をそれぞれ示す。続いて通時的分析の一例として中世アルバニア語のテキストにおける重叙表現を現代語のそれと比較し、次にアルバニア語の主要な3つの方言テキストを用いて、それぞれの重叙表現を共時的観点から比較する。最後に、他のバルカン諸語における重叙例との対照を行い、そこから考えられるいくつかの可能性を示す。

第2章では、第1章で提示された疑問点を明らかにする。まず非印欧語を含む世界の言語から重叙表現に類する例を取り上げ、比較対照する。また重叙表現をめぐる論争の過程をたどり、それぞれの先行研究に見られる特徴と問題点を示したのち、統語論および言語類型論の観点から筆者の立場を明らかにする。これらの考察は、単文における重叙の場合、補文節内における重叙の場合に分けて行う。

---

<sup>2</sup> 広義には、関係節や *that* 節などの従属節も「補文 (complement sentence)」として差し支えないだろう。この点に関する理論的な背景の解説は稲田 (1989)、長原 (1990) 及び van Valin/ LaPolla (1997: 497ff.) に詳しい。

以上の点を踏まえて、第3章でアルバニア語の重叙現象の特質を結論として示す。これが本論文の目標である。

### 1.1.3. 引用テキストについて

例文の検索に用いたテキストは次の通りである。

現代標準アルバニア語の例文収集には主に Kostallari (1989) と Shkurtaj/Hysa (1996)、それに *Historia 4* および *Historia 8* を用いる。これらは 1980 年代後半にごく平易な標準語で書かれた教科書であり、特に前者 2 冊は外国人をも読者対象としているため、詩や小説など文章語のテキストだけでなく、会話独特の表現例や、若干古い (19 世紀後半～20 世紀初頭) テキストも豊富に収められている。また後者 2 冊は歴史教科書で、文脈の流れが自然であるため、単文および関係節における重叙表現と談話の関係を分析するのに都合がよい。また文学テキストとしては Agolli (2000) と Kadare (2001) を用いる。両者は共にアルバニア文学の世界を代表する現代の作家であり、文体は模範的な文章語のそれである。また Shkurtaj/Hysa (1996) に近代アルバニア人作家による詩・小説からの抜粋が多数掲載されているので、これも (散文に限って) 用いる。その他必要に応じてアルバニア語圏の新聞記事、インタビュー、辞書・文法書類から抜粋した文例も用いる。

アルバニア語による現存最古の文献は、北部アルバニア出身のカトリック司祭 Gjon Buzuku が 1555 年に刊行したミサ用祈祷書 *Meshari* (it.; *Il Messale*) である (Camaj 1960: 7-9, Elsie 1997: 33-36, Hamiti 1996: 23-25)。大部分は聖書の抄訳より成り、北部方言を主に、他地域の方言も広く含んだアルバニア語で書かれている。従って、その当時としては最も体系化された (あるいは、されつつあった) アルバニア語テキストと言える。本論文では、この中世アルバニア語の文献を通時的分析の対象として用いる。詳細は 1.3.4. を参照されたい。

*Meshari* については、1740 年にローマで唯一の残部が発見されていたが、今世紀に入ってアルバニア語の通時的な研究上最も重要な資料として注目される様になり、数回の部分的な紹介を経て、テキスト全文のファクシミリ版がヴァチカン (Ressuli 1958) とアルバニア (Çabej 1968) で刊行され

ている。本論文では後者(Çabej 版)からの例文を用いたが、適宜前者(Resulli 版)とも照合している。また方言テキストについては、それぞれの方言について筆者の入手し得た最新の文献から文例を採用した。詳細は 1.3.5.を参照されたい。

他のバルカン諸語の例は主に参考文献と辞書類から引用しており、出典は必要に応じ本文中に示してある。

## 1.2. アルバニア語文法の概観

### 1.2.1. アルバニア語における形態・統語上の特徴

#### 1.2.1.1. アルバニア語の現状と言語史概説

アルバニア語 *gjuha shqipe* は、アルバニア人の母語であり、アルバニア *Shqipëria* 共和国の公用語である。使用人口はアルバニア国内に 270 万人<sup>3</sup>、ユーゴスラヴィア連邦共和国のコソヴォに約 120 万人<sup>4</sup>、マケドニア共和国及びモンテネグロ共和国に計約 50 万人<sup>5</sup>、チャメリア *Çamëria* などギリシア国内に約 5 万人<sup>6</sup>、イタリア南部カラブリア *Kalabria* 及びシチリアに約 8 万人<sup>7</sup>と言われる。その他ブルガリアのマンドリツァ *Mandrica*、トルコ、ウクライナに小数、さらにアメリカ合衆国にも数万人のアルバニア系移民が生活しており<sup>8</sup>、アルバニア語話者の総数は約 500 万人と考えられている<sup>9</sup>。

アルバニア語は、1850 年にインド・ヨーロッパ語族に属することが確認されて以来、その起源をめぐって古代イリュリア語から発展したとする説と、トラキア語からとする説が大きく対立している<sup>10</sup>が、今日に至るものなお決定的な見解は出されていない。同系統で類縁関係の言語が現存せず、ギリシア語やアルメニア語と同様、1 言語でインド・ヨーロッパ語族内の 1 語派（アルバニア語派）を形成している。

現代アルバニア語の方言は、アルバニア国内では同国中央を東西に横切るシュクンビン川 *Shkumbin* を大まかな境界線として、北部のゲグ方言 *gegërisht* と南部のトスク方言 *toskisht* とに大別される<sup>11</sup>。国外でも、15～16 世紀にイタリアへ移住したアルバニア人によるアルバニア語を「アルバレ

---

<sup>3</sup>Shkurtaj (1996) および Hutchings (1996) による。

<sup>4</sup>Shkurtaj (1996) および Hutchings (1996) による。

<sup>5</sup>Shkurtaj (1996) および Hutchings (1996) による。

<sup>6</sup>Shkurtaj (1996) および Hutchings (1996) による。

<sup>7</sup>Shkurtaj (1996) および Hutchings (1996) による。

<sup>8</sup>Shkurtaj (1996) および Hutchings (1996) による。

<sup>9</sup> 以上の地名はアルバニア語の呼称で統一した。

<sup>10</sup> この論争の経緯の日本語による概要については直野 (1991) に詳しい。

<sup>11</sup> アルバニア語の方言の概要は Gjinari (1989) に詳しい。

シュ arbëresh」<sup>12</sup>と称し、またギリシア国内に散在するアルバニア系住民により保持されているアルバニア語は「アルヴァニティカ arvanitika」<sup>13</sup>と呼ばれる。

アルバニア語は歴史的にラテン語やギリシア語、トルコ語、ルーマニア語や南スラヴ諸語の影響を受けている。統語面では、ラテン語やトルコ語はアルバニア語にほとんど影響を及ぼしていないが、両言語に由来する語彙はアルバニア語に多い<sup>14</sup>。

アルバニア語のテキストは(1.1.3.で触れた様に)1555年の祈祷書 Meshari が最古のものとされている。これは、ゲグ方言を主体としている。19世紀まではローマ、ビザンツ、トルコなど周辺大国による分断支配の影響で地域間の方言差が激しく、アルファベットも地域によりラテン文字やギリシア文字、あるいはアラビア文字を用いる等、一致していなかった<sup>15</sup>。

19世紀初頭の文学者による「民族復興運動 Rilindja Kombëtare」をきっかけとしてアルバニア国内における標準語確立への動きが本格化し、1908年にラテン文字を用いる現在のアルファベットが成立し<sup>16</sup>、第二次世界大戦後の社会主義政権樹立を経て、トスク方言を基礎とする標準語制定の動きが優勢となった<sup>17</sup>。ユーゴスラヴィア内のアルバニア人はゲグ主体の標準

---

<sup>12</sup> この名称は、ギリシアのアルバニア人をも含めて、広く南西ヨーロッパへ移住したアルバニア人全般を指すことがある。

<sup>13</sup> ギリシアのアルバニア系住民は、自らを arvanítō (複数形)と称し、また自らの言語を arvanítē(女性複数形)と呼ぶ。地域や年代によっては arbref に由来する古称 arbërišt も用いられる。一方ギリシア語では αρβανίτες (複数形)、またその言語は αρβανίτικα (中性複数形)と呼ばれる。この言語名について、先行する研究ではドイツ語の中性名詞 Arvanitika または形容詞由来の中性名詞 das Arvanitische を用いるが、本稿では Sasse(1991a, 1991b) に倣って Arvanitika を用いる。

<sup>14</sup> ラテン語由来の語彙については Haarmann (1975)、トルコ語由来の語彙については Boretzky (1975, 1976) に詳しい。

<sup>15</sup> アルファベット確立までの過程については Osmani (1999) が最も新しく詳しい。また最も簡潔でバランスの取れた解説としては Hutchings(1996) も参照されたい。

<sup>16</sup> 1908年11月14日から22日まで Monastir (Manastir とも。現在はマケドニア共和国の Bitola) に文学・言語学界および宗教界の代表らが集まり、文字体系を決定した。

<sup>17</sup> 解放戦争時の指導者の多くが南部出身で占められていたことによるトスク至上主義には、主にアルバニア国外在住のアルバニア人による批判が

語を用いていたが、1968年までにはトスク主体の標準語を正式に受け入れることとなった<sup>18</sup>。その後1972年に標準アルバニア語の正書法<sup>19</sup>が制定され、あらゆる分野で標準語の普及が進んだ。しかし1991年のアルバニアにおける政権交代以降、地方文学や放送などでゲグを中心として各種方言の復権が進んでいる<sup>20</sup>。

本論文で主な研究対象として取り扱うのは、1972年正書法にもとづく標準アルバニア語である。

#### 1.2.1.2. 形態上・統語上の特徴

アルバニア語における名詞の文法的性は男性・女性・中性の3つである。ただし、中性名詞の大部分は男性名詞か女性名詞に吸収されており、今日では形容詞からの派生語や若干の物質名詞など少数が中性名詞として分類される<sup>21</sup>。

数には単数と複数の区別があり、名詞はそれぞれの数で主格・対格・属格・与格・奪格の5種類の格語尾を持つ。さらにそれぞれの語幹には定冠詞に相当する語尾を接尾辞の形で伴う場合がある<sup>22</sup>。これは英語で **definite**

---

行われた。Pipa (1978, 1989)、および Camaj (1984)。

<sup>18</sup> ただし実際には完全な標準語でなく、「規範化されたゲグ方言」とも言われる、ややゲグ方言の傾向を残した書き言葉が新聞等でも見られた。

<sup>19</sup> 会議の内容は Kostallari (1973) に詳しい。また同時に刊行された正書法辞典 *Drejtshkrimi i gjuhës shqipe* (1973) は、現在も広く用いられている。

<sup>20</sup> 例えば、アルバニアでも90年代に入り、ドイツ語圏を拠点にゲグ方言による詩や小説の執筆を続けた Martin Camaj への再評価が進んでいる。

<sup>21</sup> Buchholz/ Fiedler (1987)。

<sup>22</sup> 定形の作りかたについて、その特徴をまとめると以下のようになる；

(1) 不定形の語尾が軟口蓋閉鎖音 -k や -g、または無声声門閉鎖音 -h で終わるもの → 定形語尾 -u

shok → shoku 友人、同志 (男)

zog → zogu 鳥

krah → krahu 腕

(2) 不定形の語尾が(1)以外の子音で終わるもの、またはアクセントのある母音で終わるもの → 定形語尾 -i

suffix、ドイツ語では *determinierter Suffix* と呼ばれる<sup>23</sup>（その他、学者の母語により名称が若干異なる）が、本稿では定形語尾、あるいは後置定冠詞と称する<sup>24</sup>。定形語尾については次節以下で詳説する。

現代語における属格・与格・奪格は同形である<sup>25</sup>が、属格名詞には常に

---

（※ アクセントのない語中の母音 *ë* は脱落する）

*student* → *studenti* 学生（男）

*libër* → *libri* 本

*baba* → *babai* 父親

（3 a）不定形の語尾がアクセントのない *ë* か *e* で終わるもの → 定形語尾 *-a* または *-ja*

（※ アクセントのない語尾の母音 *ë* や *e* は脱落する）

*shkollë* → *shkolla* 学校

*studente* → *studentja* 学生（女）

（3 b）不定形の語尾が子音で終わるものでも、定形語尾が *-a* で終わることがある。

（※ アクセントのない語中の母音 *ë* は脱落する）

*motër* → *motra* 妹

（4）不定形の語尾がアクセントのある母音で終わるもの → 定形語尾 *-a* または *-ja*

（※ 語尾の母音 *ë* や *e* はそのまま）

*shtëpi* → *shtëpia* 家

*Shqipëri* → *Shqipëria* アルバニア

*kafene* → *kafeneja* 喫茶店、カフェ

<sup>23</sup> 形態論全般について比較的早くからの研究としては *Boisson* (1956)。

<sup>24</sup> 言語全般における定形語尾の概論として早くから存在するのは *Graur* (1937)、新しいもので諸言語（アルバニア語も含む）の用例が豊富なものとしては *Lyons* (1999: 77ff.)。また現代ギリシア語とアルバニア語の対照は井浦 (1999b)。

<sup>25</sup> 奪格不定形語尾が *-sh* となるが、現代語ではしばしば定形 (*-ve*) と同形になる。また古形では奪格語尾は *-et* で、現在でも文章語に見られることがある。

adjectival particle (形容小辞、または形容定冠詞とも言う) が前置される。adjectival particle は、限定する名詞の性・数・格によって変化する。男性名詞 shok「友人、同志」の変化を示す(表1)。

表1 男性名詞 shok「友人・同志」の語形変化

	sg.		pl.	
	indefinite form	definite form	indefinite form	definite form
nom.	shok	shoku	shokë	shokët
acc.	shok	shokun	shokë	shokët
gen.	i/e shoku	i/e shokut	i/e shokëve	i/e shokëve
dat.	shoku	shokut	shokëve	shokëve
abl.	shoku	shokut	shokëve (shokësh)	shokëve (shokësh)

形容詞は、上述の前置形容小辞を伴うものと伴わないものがあり、強調などの場合を除き名詞に後置される。形容詞自体は、限定する名詞の性・数によって変化する(無変化の場合もある)、格変化はしない。さらに、限定する名詞が定形であるか不定形であるかによっても前置形容小辞は異なる。

代名詞は、人称代名詞、再帰代名詞、所有代名詞、指示代名詞、疑問代名詞、関係代名詞、不定代名詞、否定代名詞に分類される。上述の前置形容小辞を伴うものもあり、その場合は名詞に後置されることも多い。人称代名詞は対格と与格にそれぞれ強形 (full form) と弱形 (short form) があり<sup>26</sup>、弱形は動詞の直接または間接目的語としてその直前に置かれる。さらに弱形人称代名詞は、強形人称代名詞や普通名詞と共起することがあるが、これが本論文で扱う「目的語の重叙表現」である。

人称代名詞の主格・対格・与格における変化表を示す(表2)。

表2 人称代名詞の語形変化1

<sup>26</sup> 以下、本論文では「強形 (full form) / 弱形 (short form)」と呼ぶことにする。この呼び方は研究者や言語圏によっても様々で、例えばドイツ語圏では Buchholz/ Fiedler (1987) で volle Form / Kurzform (時に schwache Form)、また Camaj (1984) の英語版では strong form / weak form となっている。また Newmark/ Hubbard/ Prifti (1982) の様に弱形を pronominal clitics と称し personal pronouns と別項目で取り扱っている例もある。この他の研究については Barri (1975)。

	sg.				pl.				
	1 <sup>st</sup> .pers.	2 <sup>nd</sup> pers.	3 <sup>rd</sup> .pers.		1 <sup>st</sup> .pers.	2 <sup>nd</sup> pers.	3 <sup>rd</sup> .pers.		
			m.	f.			m.	f.	
nom.	unë	ti	ai	ajo	ne	ju	ata	ato	
acc.	full	mua	ty	atë	atë	ne	ju	ata	ato
	short	më	të	e	e	na	ju	i	i
dat.	full	mua	ty	atij	asaj	neve	juve	atyre	atyre
	short	më	të	i	i	na	ju	u	u

アルバニア語の動詞は、多くが能動相と中・受動相の2つの相を持つ。また直説法、接続法、条件法、感嘆法、命令法の6つの法を持つ。特に感嘆法は、他のバルカン諸語に見られないアルバニア語独特の法の形態である<sup>27</sup>。時制の表現には現在、半過去（未完了過去とも）、単純過去（アオリストとも）、複合過去（現在完了とも）、大過去（過去完了とも）、先立過去、未来、未来完了の8つがある。他のバルカン諸語と同じく動詞の不定形はなく、分詞の構文がこれに変わる<sup>28</sup>。

アルバニア語の基本語順は SVO である。

### 1.2.2.アルバニア語の人称代名詞と関係代名詞

表2から、アルバニア語の人称代名詞で重叙に関わる部分を単数のみについて簡潔に抜き出し、整理すると次の様になる（表3）。

表3 人称代名詞の語形変化2

	1.sg.	2.sg.	3.sg. (full/short)
nom.	unë	ti	ai(m.) ajo(f.)
acc.	mua / më	ty / të	atë / e
dat.			atij(m.) asaj(f.) / I

関係代名詞には性・数・格によって屈折する *i cili* と不変化の *që* の2種

<sup>27</sup> 動詞の分詞形語幹と、助動詞としての *kam*（英語の助動詞 *have* に相当する）とから成る。例； *Është e bukur.* (lit. It's beautiful.) > *Qenka e bukur!* (分詞形 *qenë* > *qen-* + *ka*) 「きれいだなあ、！」

<sup>28</sup> 北部方言では前置詞 *me* + 動詞の分詞形という形で、不定詞を用いた場合に近い表現をつくることのできる。例； *kam me shkue.* (lit. I have to go) 標準語では *do të shkoj.* (lit. I want to go (subj.))

類がある。ここでは i cili の変化を示す（表 4）。

表 4 関係代名詞 i cili

	sg.		pl.	
	m.	f.	m.	f.
nom.	i cili	e cila	të cilët	të cilat
acc.	të cilin	e cilën	të cilët	të cilat
dat./abl.	të cilit	së cilës	të cilëve	të cilave
gen.	i/e të cilit	i/e së cilës	i/e të cilëve	i/e të cilave

i cili を用いた例には次の様な文がある。ここで弱形人称代名詞 i は të cilët に文法的に一致して「これらの土地」を示している。

(1) Këto toka                    të cilët    i            hapën            kooperativistët ....

these earth-indf.sg.nom. whom 3.pl.acc. open-aor.pl.3 cooperativist-df.pl.nom.

「共同農業組合のメンバーたちが（それを）切り開いたこれらの土地は…」

ここで i cili を不変化の që に置き換えることができるが、この時重叙代名詞 i が常に現れるわけではない。この点については後述する（1.3.3.および第 2 章）。

(2) Këto toka                    që        (i)            hapën            kooperativistët ....

these earth-indf.sg.nom. which 3.pl.acc. open-aor.pl.3 cooperativist-df.pl.nom.

「共同農業組合のメンバーたちが切り開いたこれらの土地は…」

### 1.2.3. 補文標識としての接続詞

既出の që または se は、補文を受ける接続詞（英語 that やドイツ語 daß、フランス語 que に相当する）でもある<sup>29</sup>。se または që を用いた文には次の様な例がある。ここで代名詞 e は se 以下すべてを目的語として重叙している。

(3) Unë    e                    dija                    se do të votohet.

I    3.sg.acc.            know-impf.sg.1    that            will be delayed-subj.med.sg.3

<sup>29</sup> 補文標識 se と që について、井浦（1995）は補文内容の法叙性による使い分けの可能性を指摘している。

「私は、彼が遅れて来ることを知っていた」

上の例文から e を削除できない場合がある。これは、補文が主要部動詞に対して直接目的語の位置にあり、補文に示された内容が既知の事柄として表わされている時、要するに文の主題となる時に重叙を生ずるためであると筆者は考える。第 2 章 (2.1.5.2.1.3.) で詳述する。

### 1.3. アルバニア語における目的語の重叙

#### 1.3.1. 代名詞弱形と目的語の共起

1.1.1.で既に言及している様に、強形人称代名詞や普通名詞の目的語が弱形人称代名詞と共起する現象を「目的語の重叙」という。これは、さらに正確に言えば、直接目的語または間接目的語に、性・数・格および人称において一致する弱形人称代名詞があらわれ、動詞の直前に置かれる現象である。

この様な表現は本論文の対象であるアルバニア語ばかりでなく、バルカン諸言語の大部分、すなわちルーマニア語、ブルガリア語<sup>30</sup>、マケドニア語およびセルビア語の南東方言<sup>31</sup>、現代ギリシア語にも見ることができる<sup>32</sup>。さらに西ロマンス語でも似た様な現象が知られている（先行研究など詳しくは2.1.1.2.）。簡単な例を示す；

(ルーマニア語)

- (4) L-                    am văzut        pe \_\_\_\_\_ altul.  
m.3.sg.acc.   see-pf.sg.1 (accusative particle) other-df.  
「私はまた別の人を見た」

(ブルガリア語)

- (5) Петър        го \_\_\_\_\_ боли        главата.  
Peter-acc.   m.3.sg.acc.   hurt-sg.3 head-df.nom.  
「ペタルは頭が痛い」(lit. ペタルを頭が痛くする)

(マケドニア語)

- (6) Петре    го                    изеде        јаболкото.

<sup>30</sup> バルカン諸語におけるブルガリア語の位置付けについては Skok (1933)、Seidel (1963)、Ницолова (1986)。また、ロシア語の代名詞との比較を行った例としては Тагамлицка (1963)。

<sup>31</sup> セルビア語でも限定された地域で重叙表現が見られるとの指摘は、直野 (1991) 他に見られる。ただし実例が示されていないので、どの程度の広がりを持つのかは不明である。

Peter m.3.sg.acc. eat-sg.3 apple-df.sg.acc.

「ペタルは(その) 林檎を食べる」

(現代ギリシア語)

(7) To κάστρο το είδανε χτες.

the castle m.3.sg.acc. see-aor.pl.3 yesterday

「きのう彼らは(その) 城を見た」

(イタリア語)<sup>33</sup>

(8) Ma perché non mi hai avvisata, lo facevo un salto a Napoli.

but why not me inform-pf.sg.2 it make-impf.sg.1 a leap to Napoli

「それにしてもなぜ教えてくれなかったのか (もし教えてくれれば) ナポリまでひとつとびなのに」

(スペイン語)

(9) Le di el libro a Juan.

him give-pret.sg.1 the book to Juan

「私はフアンに (その) 本をあげた」

### 1.3.2. 単文構造における目的語の重叙

1.2.1.2.で簡単に述べた様に、アルバニア語では弱形人称代名詞が、強形人称代名詞や普通名詞と共起することがある。その典型的な例は次の様なものである；

(10) Ia dha librin Agimit.

3.sg.dat.+3.sg.acc. give-aor.sg.3 book-df.sg.acc. Agim(male name)-df.dat.

「彼は(その) 本をアギムにあげた」

ここでは対格形 librin に対して弱形対格人称代名詞 e が、また与格形

---

<sup>32</sup> Walter (1966)。

<sup>33</sup> イタリア語についてさらに詳しくは Meriggi (1938)、Rohlf (1949: 202-203, 444-446)。

Agimit に対して弱形対与格人称代名詞 i が共起している（文中では融合形 ia）。

### 1.3.3. 補文構造における目的語の重叙

アルバニア語の関係代名詞には、性・数・格によって語形変化する i cili と、全く語形変化しない që がある（Buchholz/ Fiedler 1987, 300-302）。目的語としての i cili は対格・与格いずれにおいても常に重叙代名詞を伴う。

(11) shoku                      im,    të cilin                      e                      njeh                      edhe    ti  
friend-df.sg.nom.    my    which-m.sg.acc. 3.sg.acc. know-sg.2    also    you  
「君も（その人を）知っている私の友人」

通常 që は主語か直接目的語として用いられ、目的語としての代名詞重叙は起こり得るが、義務的ではない<sup>34</sup>。

(12) Librat,                      që    ø    më                      dhe,                      i                      lexova.  
book-df.pl.acc. that    1.sg.dat. give-aor.sg.2    3.pl.acc.    read-aor.sg.1  
「君が僕に（それを）くれた本は読んだ」

(13) shamia                                      që    e                      mbante                      në    dorë  
handkerchief-def.sg.nom. that    3.sg.acc. hold-impf.sg.3 in    hand  
「彼が（それを）手に持っているハンカチ」

### 1.3.4. Buzuku(1555)に見られる目的語重叙の傾向

#### 1.3.4.1. Gjon Buzuku における人称代名詞弱形と強形の共起

ここでは、聖書と対照可能な Buzuku のテキストから目的語（目的語節）句の用例を示し、他の現代アルバニア語、あるいは同時期の他のアルバニア語テキストとの間にどのような異同が見られるか検討する<sup>35</sup>。

<sup>34</sup> 日常的な使用の観点から説明しているものとして例えば Totoni (1985) や Karapinjalli (1987)。これについては 2.1.1.2. も参照のこと。なお、この例文以降、重叙代名詞がない例文でも、比較の便を考え、統語上あり得ると考えられる位置に「ø」を付しておく。

<sup>35</sup> 今回は Meshari (Çabej 版) の中から、筆者が十分に解読可能と思われた 374 の文例を用いた。ただし該当する構文そのものはごく少なく、本文中

#### 1.3.4.1.1. 1人称および2人称の場合

Buzuku の場合、1人称及び2人称の場合に重叙が起こることは、既に Demiraj (1993) が指摘しているが、これを例文で確かめよう。1人称における重叙は次の例があり、既に現代語の用法に近いと言える(“ ”内は Vulgata 訳 (1994年版)、( )内は現代アルバニア語訳 (1994年版))。

(14) Përherë ju të kini të vobegj me vetëhenë, e muo të mos  
anytime you have-subj.pl.2 the poor with oneself and 1.sg.acc. not  
më kini përherë.  
sg.1.acc. have-subj.pl.2 anytime

“nam semper pauperes habetis vobiscum me autem non semper habetis” (Mt 26:11)

「貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、私はいつも一緒にいるわけではない」

(Skamnorët i keni gjithmonë me vete, e mua nuk më keni gjithmonë)

(15) E mos na sjellë neve ñde e tentuom,  
and not 1.pl.acc. pull-imp.sg.2 1.pl.acc. at be tempted  
por neve na liro ñ së keqi.  
but 1.pl.acc. 1.pl.acc. liberate-imp.sg.2 from the evil-abl.

“et ne indicas nos in temptationem sed libera nos a malo” (Mt 6:13)

「私たちを誘惑にあわせず、悪いものから救ってください」

(E mos lejo të biem në tundim, por na shpëto nga i Ligu!)<sup>36</sup>

例(16)も1人称が重叙している。ただし2人称の方は重叙していない。

(17)もそうした例の一つである。

(16) U për të vërtet juve ø thom se një ñ jush muo  
I for the true 2.pl.dat. say-sg.1 that one from you 1.sg.acc.

---

で特に数をあげないものは例文の1例のみである。

<sup>36</sup> この現代語訳はまったく別の文体で書かれており、重叙は含まれない。

të më tradhëtonj .

1.sg.acc. betray-subj.sg.3

“amen dico vobis, quia unus vestrum me traditus est” (Mt 26:21)

「[諸君に] はっきり言うておくが、あなた方のうちの一人が私を裏切ろうとしている」

(Për të vërtetë po ju them: njëri prej jush do të më tradhetojë)<sup>37</sup>

(17) Për të vërtetë u juve ø thom se u nukë gjeta

for the true I 2.pl.dat. say-sg.1 that I not find-aor.sg.1

kaqë fe ñdë Israelt.

such religion at Israel

“amen dico vobis non inveni tantem fidem in Israhel” (Mt 8:10)

「[諸君に] はっきり言うておく、イスラエルの中でさえ私はこれほどの信仰を見たことがない」 (Për të vërtetë po ju them...)

例(16)(17)の様に重叙を伴わない *juve thom se...*の構文は、この他にも4例見られたが、現代語では強形 *juve* のみが動詞に先行することはあり得ない。常に弱形 *ju* を動詞の直前に伴うか、さもなければ（現代語訳の様に）弱形 *ju* のみが動詞の直前に置かれるかである。この型は動詞 *thom* 「言う」を用いた文で特に多いが、*Buzuku* においてはこの *thom* に先立って *u për të vërtetë* 「諸君にはっきり」など（聖書独特の）決まり文句が置かれることが多く、文体上固定されたものになっているが為に重叙が起こりにくくなっているとも考えられる。

一方、*Buzuku* から約3世紀後、南部アルバニア出身の文学者 *Kostandin Kristoforidhi* (1826~1895)<sup>38</sup>による1872年の訳では次の様になっている

<sup>37</sup> 現代語訳の場合、「諸君に」の部分には重叙を要する強形でなく、弱形のみを用いている。

<sup>38</sup> *Kristoforidhi* は 翻訳家・文法家としてギリシアのヨアニナやアテネ、またトルコのイスタンブールやイズミルを拠点として活動した。オーストリア人 *Johann Georg von Hahn* による *Albanesische Studien* (1854年刊行)の執筆に協力した他、みずからもアルバニア語の文法書 (*Kristoforidhi* 1882)

(Cirrincione 1968: 85)。

(18) Me të vërtet po u thom juve se as ndë  
with the true now 2.pl.dat. say-sg.1 2.pl.dat. that anything at  
Israel s' kam gjetunë kaqi besë .  
Israel not find-pf.sg.1 such belief

「諸君にはっきり言うておく、イスラエルの中でさえ私はこれほどの信仰を見たことがない」

ここでは、Buzuku と同じ箇所の人称代名詞強形が弱形で繰り返されており、この時点で既に今日の重叙傾向により近付いていると考えられる。

#### 1.3.4.1.2. 3 人称の場合

3 人称の目的語の場合は、与格であれ対格であれ重叙が起こらない例の方が多。

(19) Ñd atë mot ø tha Jezu dishipujet vet.  
at that time say-aor.sg.3 Jesus disciple-df.pl.dat. own

“altera die ad discipulos suos ait” (Lk 16:19?)

「その翌日イエスは弟子たちに言われた」<sup>39</sup>

(Të nesërmen Jezusi u tha nxënësve të vet)

ちなみに Kristoforidhi 訳では次の様になっている。現代語では間接目的語（与格）の重叙は義務的なものである。従って、こちらの方が現代語の用法に近いと言える。

(20) U thoshte edhe dushepujvet vet.  
3.pl.dat. impf.sg.3 also disciple-df.pl.dat. own

---

をイスタンブールで出版（説明はギリシア語で書かれている）し、また 1904 年には対訳辞書（アルバニア語ーギリシア語）をアテネで出版している。特に文法書の方は、当時としてはほとんど最初の本格的なものと言える。

<sup>39</sup> この様な「イエスは弟子に言われた」型の文は新約聖書に頻出する、いわば固定された表現であり、データとして他の例とは別扱いとする。

「イエスは弟子たちにも言われた」

だが筆者の調べたところでは、Buzuku でも 3 人称与格で重叙する<sup>40</sup>。特に「主は彼らに言われた」型の文に限ってみれば、与格弱形 *u* の重叙を伴う例は存在する。

(21) E i mujtuni Zot bekoi ata e u tha atyne  
and omnipotent God bless-aor.sg.3 them and 3.pl.dat. say-aor.3 3.pl.dat.  
kështu tue i ordhënuom... (XXVI)  
so (gerundium) 3.pl.acc. order-part.

「全能なる主は [アダムとエヴァを] 祝福し、[二人に] 語って言われた」

こうした例は、近代では義務的なものとなっている間接目的語の重叙、それも人称代名詞与格の重叙が、Buzuku の時代から確立されつつあった可能性を示している。

では直接目的語（対格）は重叙しないだろうか。確かに、重叙しない例は与格の場合よりも多いと思われる。

(22) E ata ø bekoi Zotynë...  
and them bless-aor.sg.3 Lord  
“benedixitque eis” (Gen 1:22) 「神はそれらのものを祝福して…」  
(Hyji i bekoi...)

この場合、現代語であれば、言及済みとして導入された目的語は重叙し、対格弱形 *i* が動詞 *bekoi* に前置される（例えば ata i bekoi）のが自然である。この例について言えば、Buzuku の用法は現代語の傾向と一致しない。

しかし一方では、テキストの文脈を精確に意識して行われたと考えられる様な重叙の例が 1 組存在した。次の連続する 3 例文は福音書において、ペトロが捕えられたイエスのことを「知らない」と 3 度言う場面のアルバ

---

<sup>40</sup> Buzuku のテキストにおける人称代名詞弱形の文中配置の傾向については Buchholz/ Fiedler (1977) に詳しい。

ニア語である。

(23) U nukë di qish ti më thuo.

I not know-sg.1 what thou 1.sg.dat. say-sg.2

“nescio quid dicis” (Mt 26:70)

「何のことを言っているのか、私にはさっぱりわからない」

(Nuk di ç'po thua)

(24) Se u këtë nieri nukë e njoh.

that I this man not 3.sg.acc. know-sg.1

“quia non novi hominem” (Mt 26: 72)

「[ペトロは再び]『そんな人は知らない』[と誓って打ち消した]」

(As që e njoh atë njeri)

(25) se aj nierinë \_\_\_\_\_ atë nukë e njoh.

that he man-df.sg.acc. that not 3.sg.acc. know-sg.3

“quia non novisset hominem” (Mt 26:74)

「[ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら]『そんな人は知らない』[と誓い始めた]」

(se nuk e njihete atë njeri)

#### 1.3.4.2. 目的語補文を受ける弱形代名詞の例

Buzuku の場合、大部分の例は重叙なしである。

(26) E ø pa Zotynë se drita ish \_\_\_\_\_ e mirë.

and see-aor.sg.3 Lord that light be-impf.sg.3 good

“et vidit Deus lucem quod esset bona” (Gen 1:4)

「神は光を見て、良しとされた」(lit. 『神は光が良いことを見た』)

(Hyji pa se drita ishte gjë e mirë)

(27) Ñd atë mot ø pa Gjoni Jezunë se vin tek aj.

at that time see-aor.sg.3 John-nom. Jesus-acc. that come-sg.3 to he

e tha.

and say-aor.sg.3

“altera die videt Iohannes Iesum venientem ad se et ait” (Jh 1:29)

「その翌日ヨハネは自分の方へイエスが来られるのを見て言った」

(Të nesërmen Gjoni e pa Jezusin duke ardhur kah ai e tha)

しかし主節の動詞が知覚動詞 *verba sentiendi* である場合、重叙を伴うものも1例あった。これは現代語ではしばしば見られることである。

(28) si e panë se ish shkuom ñ këso jete...

as 3.sg.acc. see-aor.pl.3 that go-plpf.sg.3 from this life

“ut viderunt eum iam mortuum” (Jh 19:33)

「[イエスのもとに] 来てみると、既に死んでおられた (lit.彼が死んだのを見て) ので…」

(si panë se kishte vdekur...)

Buzuku から約半世紀後、アルバニア北部出身の司祭 Pjetër Budi (1566～1623)によるキリスト教要理(Dottrina Christiana)のアルバニア語訳(1618年刊)にも「e...se 補文」の形がある(Demiraj 1985: 582, 引用は Demiraj 1993: 210)。

(29)...këjo shinte fjalë bukur na e shtie

this saint word beautiful 1.pl.dat. 3.sg.acc. impress-sg.3

në ndë mend e ndë shqise tanë se si o mbë qish arrësye

at in heart and at sense our that how or at what reason

na fajëtorët duhet gjithëherë e gjithëherë me e pasunë...

1.pl.dat. sinner-df.pl.dat. must always and always more wealthy

「この麗しく聖なる言葉が我々の心と意識の中に思い起こさせるのは、いかにして我々罪ある者達がより心豊かであるべきかということだ」

例(28)などを見る限り、そうした構造が既に Buzuku の時代においてもある程度確立していた可能性がある。

#### 1.3.4.3. 関係節内における代名詞重叙の例

こうした現象が見られるのは単文構造だけではない。関係代名詞 *qi*（不変化。現代語では *që*）が関係節内で目的語として機能する場合、重叙代名詞を伴うことがある。これも現代語では頻繁に見られる傾向であるが、*Buzuku* では次の 1 例のみである。

(30) *E ish një i vobeg qi e kluonjinë Laxar ...*  
 and be-impf.sg.3 one poor which sg.3.acc call-pl.3 Lazarus  
 “et erat quidam mendicus nomine Lazarus” (Lk 16:20)  
 「ラザロという貧しい人が…」 (*një skamnor, që quhej Lazër*)<sup>41</sup>

同じ箇所では *Kristoforidhi* 訳に重叙が見られる。ただし関係代名詞が示すものを受けて重叙しているわけではないから、単純に比較することはできない。

(31) *i vobek qi e kishte emninë Lazar...*  
 poor which sg.3.acc. have-impf.sg.3 the name-acc. Lazarus

#### 1.3.4.4. *Buzuku* における重叙の傾向

*Buzuku* のテキストにおける動詞と目的語の構造で興味深いのは、代名詞重叙や補文標識となる接続詞節の用法等において、現代語と同様の用法が既に生じている点である。こうした特徴が *Buzuku* に特有のものだったのか、或いは中世アルバニア語において全般的に定着しつつあった傾向なのか、またバルカン諸言語の中での位置付けなど、他の中世テキストと検討していかなければならないのだが、ここでは差し当たり *Buzuku* の例から得られた傾向について見ていく。

なおその前に、こうした重叙の頻度が現代語のそれと比べて格段に低いことに留意する必要がある。本論文で挙げた例は、あくまで重叙現象の生じているものを主に選んだものであり、テキスト全体では、弱形人称代名詞を伴わず、目的語（または目的語節）のみ、または強形人称代名詞のみという文の方が圧倒的な割合を占める。特に、

<sup>41</sup> 現代語訳は「ラザロ」が主語になっているので、*Buzuku* とは比較できない。

①Buzuku のテキストでは、現代語においてはむしろ義務的とさえ言える与格の重叙傾向が進んでおらず、

② 1 人称または 2 人称代名詞の弱形による重叙も、例は存在するものの、必須的に生じているわけではない。

といった点で、中世アルバニア語の目的語重叙に、現代語と全く同様の傾向を見ることは勿論できない。その点は、過去の研究でも指摘されていることである。

だがその一方で、

① 3 人称代名詞の弱形による重叙は、数は少ないものの皆無ではない。例えば(21)に見られる様な構文も存在する。

② しかもそれらの中には、1.3.4.2.で示した様に補文節全体を受けるものや、1.3.4.3.で示した様に関係節全体を受ける例も存在する。

③ また例文(23)(24)(25)の様に、文脈を意識した重叙の例がある。など、今日のアルバニア語にもよく見られる様な例が既に現れている。

特に(21)について付言しておくとして、特定の表現に集中しているとは言え、与格に対する義務的な重叙表現の一步手前とも見える傾向が Buzuku のテキストに存在することは、興味深い。

1.3.4.1.2.で既に述べた様に現代アルバニア語の与格（間接目的語）は義務的に弱形で重叙される。一般的に言えば、与格、或いはより正確に言えば、行為の受容者（recipient）は、有標性の階層（“markedness” hierarchy）<sup>42</sup>において他動詞の目的語である対格、或いは被動作主（patient）より上位で、また話題性の階層（topic hierarchy）においても被動作主の上位にある<sup>43</sup>。しかも与格が示すものは殆どの場合[+human]か[+animate]であり、これもまた話題性の階層の上位に位置する。更に[+human]や[+animate]という条件下では、スロヒリ語やルーマニア語など他の言語でも、二重目的語の構造が知られている<sup>44</sup>。これらの点は第 2 章以降でさらに細かく検証す

<sup>42</sup> 階層性についてはこの他 van Valin/ LaPolla (1997: 205f.)。

<sup>43</sup> recipient と patient の階層関係については Givón (1984:87-89) の記述による。また “topic hierarchy” 全般についても同 (1984: 168-183)。

<sup>44</sup> ただし Givón (1984: 371-372) によればそれは definite であるか、或いは specific object である場合に限られる。ルーマニア語の詳細な例は林

るが、ここまでの例から見るところ、アルバニア語でも、本来はこうした背景で与格の重叙が行われる様になったのではないかと考えられる。ただアルバニア語が（そして他のバルカン諸言語も多かれ少なかれ）他地域の言語と大きく異なるのは、本来「話題性」などに拠って生じていたと考えられる重叙の範囲が拡大・定着し、特に与格においては、今日もはや必須の他動詞句成分と言ってもよい状態になっている点である。

以上の特徴は、本文で例を挙げた Budi など Buzuku とほぼ同時代のアルバニア語においても同様で、更に Kristoforidhi など Buzuku より若干後代のテキストを見る限りでは、それが現代語の傾向へと漸次近付いている様に見える<sup>45</sup>。

---

(1990)。

<sup>45</sup>Kristoforidhi から約半世紀後、近代アルバニア語の例として、Fan S.Noli (1882–1965) のテキストにも簡単に触れておこう。Noli はトルコに生まれ、ギリシアやエジプトでの生活を得てアメリカ合衆国に移住、アルバニア系アメリカ人として高等教育を受けた。1924 年にはごく短期間ながら、独立直後のアルバニアの大統領を務めた。

彼は本来ギリシア正教の聖職者であったが、詩人、小説家、シェイクスピア作品などの翻訳家としても知られ、そのアルバニア語はアルバニア南部のトスク方言 (toskërisht) を基本とする (Agalliu 1999: 133ff.)。この点は、イタリアやギリシア語圏を拠点として活動した同時期の多くの知識人が用いていたアルバニア語にも共通すると思われる。

しかし Kristoforidhi の活躍時期が 19 世紀後半であるのに対して、Noli のそれは既に 20 世紀の前半期を中心とし、時期としてはアルバニア国民の文芸復興や言語統一運動の一応の完結期にある。従ってそのアルバニア語も、今日の標準語により近付いていると言える。また入手可能な作品テキストが Kristoforidhi の場合よりも多彩かつ豊富なので、近代アルバニア語の研究に適した対象の一つでもある。

Noli のアルバニア語については、ごく最近にもまとまった研究が公表されている (Agalliu 1999)。いくつかのテキストを見る限り、名詞句を目的

---

語とする文における弱形人称代名詞の重叙については、現代語との傾向の差がほとんど見られない。一方、関係節 (Noli のテキストにおける関係代名詞は主に不変化詞 që) や補文節を目的語とする構文においても、弱形代名詞による重叙が見られる。ここではその例を 3 つ示す。

(関係節内で直接目的語として用いられる場合)

(1) gjë që nuk e dimë me siguri...

thing which not 3.sg.acc.. know-pl.1 with safety

「我々が確実には [それを] 知らないこと」 (Agalliu 1999: 130)

(関係節内で間接目的語として用いられる場合)

(2) Ay, që s' i ish in mvrojtur sytë kur i

he which not sg.3.dat.defend-pas.impf.pl.3 eye-pl.nom. when sg.3.dat.

binin shigjetat dhe gjylet si breshër mi supet,

fall-impf.pl.3 path-pl.nom. and cannonball-pl.nom. as hail on shoulder

... qan tani si ilimi.

cry-sg.3 now as kid

「道を塞がれ弾丸を肩に雨あられと受け [その] 目をおおっていなかった男は…今は子供の様に泣いている」 (Agalliu 1999: 128)

(補文節を目的語として受けている場合)

(3) Kush e besonte se kjo Shqipëri e varrosur do

who 3.sg.acc. believe-impf.sg.3 that this Albania-.nom.buried will

të dilte nga gërmadhat e katastrofës...

go out-subj.impf.3 from ruin-df.pl.nom. catastrophe-df.sg.gen.

「この死せるアルバニアが破局を脱すると誰が思うだろうか」 (Agalliu 1999: 142)

こうした現象の頻度は既に Buzuku のそれを大きく上回り、むしろ現代語とほとんど同様と言ってもいい。

### 1.3.5. アルバニア語の諸方言に見られる目的語重叙の傾向

ここでは、非アルバニア語圏で使用されているアルバニア語の主要な方言として、イタリア南部、ギリシア、ブルガリア南東部の例をあげ、重叙表現の傾向について標準語の場合と比較してみよう。

#### 1.3.5.1. 各方言の概要

##### 1.3.5.1.1. Cosenza 方言

正確にはイタリア南部の Cosenza より約 20km に位置する小村 Falconara Albanese の例を取り扱う。住人 (albanesi) はアルバニア語を家庭内言語 (lingua di casa) として、イタリア語を外の社会での公用語 (lingua di pane) として用いている。教会の記録によると、1627 年からアルバニア人の居住が確認されている。かつて 3000 人以上いた居住者は、1960 年代後半の調査時点で 1800 人程度に減少している<sup>46</sup>。なお今日イタリアに定住するアルバニア人は 8 万人程度とされる (シチリアを含む)。ここでは、Camaj (1977) による Ildegonda Manes という老婦人からの聞き取りによる散文テキストを取り上げる。

##### 1.3.5.1.2. Arvanitika

バルカン半島におけるアルバニア人の南下は既に 13 世紀から始まっており、現在ギリシアに定住するアルバニア人は約 5 万人と考えられる。彼らの用いるアルバニア語が語彙面でギリシア語からの影響をかなり受けているのは言うまでもない (例えば vasi'ke < βασιλιάς) が、後述する様に、

---

特に興味深いのは(2)の例である。不変化詞の関係詞 që は専ら先行詞が関係節内で主語か直接目的語として機能する場合に用いられるもので、間接目的語として用いられる場合は、性・格変化を伴う i cili で関係節を作るのが (今日でも書き言葉においては) 標準的である。しかし現実の口語表現では、この様に与格の機能を示す që が現れることも決して少なくない。この Noli の例は、Buzuku や Kristoforidhi には見られない用法、むしろ現代のアルバニア語に定着した用法を既に含んでいると言える。

<sup>46</sup> 以上 Camaj (1977) の記述による。従って今日この話者数は、大幅に変化 (おそらく減少) している可能性がある。

統語面ではアルバニア語の独自性を保っている。ここでは Sasse (1991b) による北東アッティカ・ボイオティア地方の聞き取りテキストをもとにして分析を進める。

### 1.3.5.1.3. Mandrica 方言

Mandrica (Мандрица) はブルガリア南東部 (ギリシア・トルコ国境付近) の Ивайловград 郡にある村で、現在もブルガリア国内でアルバニア語が話されている唯一の地域とされる。同村は 15~16 世紀にアルバニア (特に南東部の Korçë) からの入植者によって形成され、今世紀の初めには既に文献にその記録が見られる。1926 年時の人口は 1082 人だったが、その後十年ごとに約百人ずつ減少し続け、1965 年の時点で 593 人との報告がある<sup>47</sup>。このうち 80% 程度がアルバニア語を話しているという。

Mandrica の方言には、標準語において死滅したゲグの古形が保持されているという特徴<sup>48</sup>もあり、一方でブルガリア語の統語的影響を受けているとの指摘もある (Mayer 1988)。ここでは Sokolova (1983) により集められたテキストをもとに分析する。

## 1.3.5.2. 主節における目的語重叙の傾向

### 1.3.5.2.1. Cosenza 方言

Cosenza 方言の強形人称代名詞はほとんどすべての例で弱形を伴う。強形について、重叙はほぼ義務的なものであると考えられる。

(32) a'jo    u                    'θa            a'tire  
         she   3.pl.dat.   say-aor.sg.3   3.pl.dat.

「彼女は彼らに言った」

<sup>47</sup>以上 Sokolova (1977) および同 (1983) による。Cosenza 方言の場合と同様、この話者数もかなり減少していることが考えられる。

<sup>48</sup> この傾向は、表 5, 6, 7 における 1 人称代名詞の形態において顕著である。すなわち Mandrica 方言では標準形 unë と古形 u が並存している。また Cosenza 方言と Arvanitika に至っては確認されている形が古形 u のみである。

普通名詞についても間接目的語の重叙例が見られる。これも義務的なものと言える。しかし一方で、直接目的語の重叙表現はまったく見られない。

(33) ˈnusja                    i                    ˈvu                    kuˈrornə                    ˈðəndrit  
          bride-sg.nom.                    3.sg.dat.                    put-aor.sg.3                    crone-df.sg.acc.  
 bridegroom-df.sg.dat.

「花嫁は花婿に冠をかぶせた」

表5 人称代名詞の語形変化 (Cosenza 方言)

	1.sg.	2.sg.	3.sg. ( full / short form)
nom.	ˈu	ˈti	ˈaj (m.)    aˈjo (f.)
acc.	ˈmua / m(ə)	ˈti / t(ə)	aˈtə / a
dat.	ˈmua / m(ə)	ˈti / t(ə)	ˈatij (m.)    aˈsaj (f.) / i

### 1.3.5.2.2. Arvanitika

Haebler (1965) や Sasse (1991b) は、人称代名詞は弱形のみでも用いられるが「特に重きを置く場合」には強形が併用され、普通名詞と文法的に一致する弱形が現れることもある、と述べている。

(34) do                    tə                    vras                    eˈðe    ti  
          will    particle+2.sg.acc.    kill-subj.sg.1    also    2.sg.acc.

「おまえも殺してやる」

(35) i                    kanoˈnis    eˈðe    aˈta  
          3.pl.acc.    finish-sg.1    also    3.pl.acc.

「私はそれらもかたづける」

実際には、目的語名詞と弱形の組み合わせは頻繁に現れており、強調の意味合いはそれほど明確なものではない。また間接目的語の場合、普通名詞や強形人称代名詞を伴うか否かにかかわらず、弱形与格を動詞の前に置くことは標準語の場合と同様、ほぼ義務的なものではないかと考えられる。

(36) e                    ˈvrau                    neˈrinə  
          3.sg.acc.    kill-aor.sg.3    man-df.sg.acc.

「彼はその男を殺した」

- (37) ia                      ʰoɔjnə              ʼembəriŋə              θaˈnas  
 3.sg.dat.+3.sg.acc.    say-aor.pl.3    name-df.sg.acc.    Thanas

「彼らは彼をサナスと名づけた」 (lit. 『彼にサナスという名を言った』)

- (38) i                      bie                      oryanojt  
 3.sg.dat.    hit-aor.sg.1    instrument-df.sg.dat.

「私はその楽器を演奏する」 (lit. 『その楽器に打ちつける』)

表 6 人称代名詞の語形変化 (Arvanitika)

	1.sg.	2.sg.	3.sg. (full/short from)
nom.	ʼu	ʼti	ʼaj (m.)    aˈjo (f.)
acc.	ʼmua / mə	ʼti / tə	aˈtə / e
dat.	ʼmua / mə	ʼti / tə	aˈtija (m.)    aˈsaja (f.) / i

### 1.3.5.2.3. Mandrica 方言

Mandrica 方言では標準語とほとんど同じ傾向を見ることができる。古いアルバニア語では1人称の代名詞についてのみ重叙が行われていたことが知られている (Demiraj 1993) が、古形の名残が多い Mandrica であるからといって、重叙の傾向も古アルバニア語同様というわけではない。

- (39) Mva              më              sa.  
 1.sg.dat.    1.sg.dat. say-aor.sg.3

「私に彼は言った」

- (40) Ty              ot              të              kam              bile.  
 2.sg.acc. will    2.sg.acc. have-sg.1    daughter

「私はおまえを娘にしよう」

- (41) Atë              ote              mármë.  
 3.sg.acc. will+3.sg.acc.    take-pl.1

「我々はそれを買おう」

- (42) Bukën              mos              e              lish.

bread-df.sg.acc. not 3.sg.acc. leave-subj.sg.2

「パンを残すな」

表7 人称代名詞の語形変化 (Mandrica 方言)

	1.sg. (full/short form)	2.sg. (full/short form)	3.sg. (full/short form)
nom.	u, un, uně	ti, tine, tin etc.	ay, aju, ai, aj
acc.	mua, muva, mva / mē	ty, tju, tjuně / tē	atě / e
dat.	mua, muva, mva / mi	ty, tju / tē	asajt, asat, asat' / i

### 1.3.5.3. 関係節における目的語重叙の傾向

#### 1.3.5.3.1. Cosenza 方言

関係代名詞は tʃə(不変化)で、関係節内で間接目的語として振舞う際に重叙の代名詞を伴う例がある。ただしこれは義務的なものではないと考えられる。

(43) e ˈmori tˈbirin tʃə -i- ˈθojn konstanˈdin  
and take-aor.sg.3 his son-df.acc. that 3.sg.dat. say-aor.pl.3 Konstandin  
「そして彼には息子を引き取り、コンスタンディンと名づけた」(lit. 『彼にコンスタンディンと言った』)

#### 1.3.5.3.2. Arvanitika

関係代名詞は tʃə(不変化)で、これが関係節内で間接目的語として振舞う場合(ただしこの例の数は、直接目的語の場合と比べると極めて少ない)には、ほとんどすべての例で弱形人称代名詞による重叙が見られる<sup>49</sup>。

<sup>49</sup> Arvanitika には、前置詞句がそのまま直接目的語の様に用いられている例がわずかだが存在する。ある種の集合名詞の様なものと考えられるが、これは標準語では見かけない用法である。

ˈhəŋgre nga a to ˈmola  
eat-aor.sg.2 from those apple-indf.pl.nom.  
「君はその林檎を(すべて)食べた」(lit. 『それらの林檎から食べた』)

こうした例は関係節内にも見られ、弱形代名詞による重叙に代わって用いられている。しかしあくまでも特殊な表現と考えられる。

ˈgruaja tʃə vdes pər a tē  
woman-df.sg.nom. that die-sg.1 for her

(44) nə ka'tund tʃə ja ˈθonə mi'loʃat  
 one village that 3.sg.dat.+3.sg.acc. say-pl.3 Milosh

「ミロシュと呼ばれる村」(『人々がそれにミロシュと言うところの村』)

一方、tʃə が関係節内で直接目的語となる時、弱形人称代名詞が共起しない例は少なくない。従って標準語の場合と同様に、これを義務的なものとするのは難しい。

(45) pande'loŋi tʃə (e) ˈbʌeva  
 trousers-df.ag.nom. that 3.sg.acc. buy-aor.sg.1

「私が (それを) 買ったズボン」

関係節内で間接目的語として振舞う関係代名詞が重叙を頻繁に生じる点は、標準語の傾向に近いと言える。なお同じギリシアの Salamis 方言について Haebler (1965) は、関係節中に何か別の直接目的語を含む場合、こうした間接目的語の重叙は常に生じると述べている。

(46) ˈgruaja tʃə ja ˈðaʃə tene'cenə  
 woman-df.sg.nom. that 3.sg.dat.+3.sg.acc. give-aor.sg.1 can-df.sg.acc

「私が (その女性に) ブリキ缶を渡した女性」

Haebler の指摘は、直接目的語との対比の必要性から与格弱形が用いられるという可能性を示したものであり、興味深い。もっとも、北東アッティカ・ボイオティア方言の例では、そういった可能性を加味するまでもなく、間接目的語の重叙はほぼ義務的なものになっている様に見える。

### 1.3.5.3.3. Mandrica 方言

関係代名詞は標準語の不変化関係代名詞 qē の異形 qe または qi が用いられる<sup>50</sup>。qi はイタリアやギリシアのアルバニア語方言にも部分的に見られるが、qe は

---

「(その女のためなら) 私が死ねる女」

<sup>50</sup> ここまでの記述から明らかな様に、以上の3方言テキストには標準語 i cili に相当する様なもの、つまり屈折を伴うタイプの関係代名詞はまった

Mandrica 方言特有の形態であり、さらに *qe* が *çe* となることもある<sup>51</sup>。

(47) Pásha                    kezánnë                    qe ø pagëzajtí.  
           see-aor.sg.1    child-df.sg.acc.    that    baptize-aor.sg.3

「私は、彼が（その子に）洗礼を施した子を見た」

(48) Ní hale    qi ø pasha                    klé                    nga Sív kládenec.  
           one woman-indf.sg.nom. that see-aor.sg.1 be-aor.sg.3 from Siv Kladenec

「私が（その女性に）会った1人の女性は、スィフ・クラデネツの出身だった」

#### 1.3.5.4. 各方言における重叙の傾向

以上の3方言について、重叙の有無について図示すると次の様になる(表8)。個々の例文における意味内容の差異は考慮されていない。

まず主節内について言えば、Cosenza 方言では直接目的語の重叙が皆無に等しいのに対し、他の2方言では重叙例が存在する。この点でこの2方言の統語機能は標準語のそれに近い。ただ、3方言に共通した点として、間接目的語の統語機能については共通の傾向が既にできあがっていると考えられる。

表 8

	Cosenza 方言	Arvanitika	Mandrica 方言	標準語
(主節内)				
間接目的語	+	++	++	++
直接目的語	-	+	+	+
(関係節内)				
間接目的語	+	+	(データなし)	++
直接目的語	-	+	-	+

(++ ; 常に重叙    + ; 任意に重叙    - ; 重叙なし)

---

く現れない。これは、ここで分析の対象とした方言テキストがすべて話し言葉から成っており、標準語の話し言葉の場合と同様、不変化形の方を好んで用いているからではないだろうか。

<sup>51</sup> つまり無声硬口蓋閉鎖音 [c] が破擦音化して [tʃ] となっている。

一方、関係節内の重叙については、Mandrica 方言に用例の少なさによる不明瞭さが残ることを除き、他の2方言には関係代名詞（不変化型）が間接目的語として振舞う場合に重叙を伴うことが多い。標準語の様にまったく義務的なものとは考えられないが、この点で間接目的語の統語面における標準語との共通性が考えられる。一方、直接目的語としての重叙は、標準語と比較すれば極端に少ないが、Arvanitika の例では標準語に近いのではないかと思われる。

### 1.3.6. バルカン諸言語に見られる目的語重叙の傾向

序論の最後として、他のバルカン諸言語における目的語重叙の傾向<sup>52</sup>を、それぞれの関係節構造を中心に、例を挙げ対照しておこう。

#### 1.3.6.1. 現代ギリシア語

現代ギリシア語については、アルバニア語に直接隣接する言語であり、興味深い異同が見られる<sup>53</sup>。以下、重叙そのものと、関係節における重叙に分けて見ていこう。

##### 1.3.6.1.1. 現代ギリシア語における目的語重叙

民衆語において、人称代名詞の強形（absolute Form）と弱形（Pronomen conjunctum）が同時に現れることは、既に20世紀初頭の文献で指摘されている（Thumb 1910: 81）<sup>54</sup>。特に強調がない場合は弱形のみが用いられる。

(49) Εμένα      με      ξέρεις.

1.sg.acc. 1.sg.acc. know-sg.2

---

<sup>52</sup> きわめて断片的な既述であるが、バルカン諸語における方言の目的語重叙に言及しているものとしては Rusek (1964: 193-194) (ブルガリア)、Mazon/ Vaillant (1938: 177-179) (ギリシア・ブルガリア) がある。

<sup>53</sup> バルカン諸語の枠組の中でギリシア語の定形について論じたものとしては Joseph (1985)。

<sup>54</sup> Лопашов (1975: 9-10) は、ギリシア語における弱形人称代名詞による直接目的語の「繰り返し」は、3人称の場合任意的だが、1・2人称の場合規則的に行なわれると述べている。但し間接目的語には見い出せなかったという。

「私を知ってますね」

(50) Το ἔβρηκε το μέρος.

3.sg.acc. find-aor.sg.3 the place

「彼はその場所を見つけた」

(51) Τ'άλλα τα ἔβραν κυνηοί.(sic.)

the others 3.pl.acc. find-aor.pl.3 hunter-pl.nom.

「その他のものを獵師は見つけた」

重叙代名詞は、目的語に先行する proleptic pronoun (『予期』的代名詞) と、目的語よりも後に来る resumptive pronoun (『繰り返し』的代名詞) に分けられる。これらはいずれも動詞の直前に置かれる (Mackridge 1985: 223-224)。

(52) Την ξέρεις τη Λούλα;

f.3.sg.acc. know-sg.2 the Loula

「ルーラを知っているか？」(proleptic pron.)

(53) Τη Λούλα την ξέρω.

the Loula f.3.sg.acc. know-sg.1

「ルーラなら知っている」(resumptive pron.)

一般に proleptic pronoun に重叙される目的語は言及済みの情報となり、目的語以外の要素を新たに言及されるべき情報として、そこに強勢が置かれる。例えば次の文では「欲しい」に強勢が置かれる。

(54) Το θέλω αυτό το βιβλίο.

n.3.sg.acc. want-sg.1 this the book

「この本が欲しい」

一方次の文は Τι θέλεις; 「何が欲しいか？」や Ποιο βιβλίο θέλεις; 「どの本が欲しいか？」といった疑問文への答えと考えられ、重叙しない「本」に強勢が置かれる。

(55) ∅ Θέλω αυτό το βιβλίο.

want-sg.1 this the book

「欲しいのはこの本だ」

resumptive pronoun の用法には proleptic pronoun のそれに似た点もある。次の例(56)と(57)では、重叙の有無と強勢との関係が例(54)(55)の場合と同じである。

(56) Αυτό το βιβλίο το θέλω.

this the book n.3.sg.acc. want-sg.1

「この本が欲しい」

(57) Αυτό το βιβλίο ο θέλω.

this the book want-sg.1

「欲しいのはこの本だ」

同様の例をもう一組あげておこう。

(58) Τη Μαρία την αγαπάει ο Γιάννης.

the Maria f.3.sg.acc. love-sg.3 the Yannis

「マリアを愛しているのはヤニスだ」(『ヤニス』または『愛する』に強勢)

(59) Τη Μαρία ο αγαπάει ο Γιάννης.

the Maria love-sg.3 the Yannis

「マリアだ、ヤニスが愛しているのは」(『マリア』に強勢)

しかし proleptic pronoun と違う点もいくつかある。例えば、定冠詞を持たない(つまり『定』でない)名詞にも対応できる。この場合、先行する目的語の直後に小休止を置いて発話するのが普通である。

(60) Φρούτα | ο τρώει καμιά φορά.

fruit-pl. eat-sg.3 any times

「(一般的に) 果物 (たとえば、それ) は時々食べるよ」

関係代名詞(που, ο οποίος)に呼応する例は次節(1.3.6.1.2.)で詳説する。その前に resumptive pronoun が文脈に与える意味をもう少し見ておこう。

この代名詞によって重叙するのは、文中で目的語以外の要素が強調される場合である。一方重叙しない時は文そのものが「無色」の表現（または『中立的（neutral）』。強調される文成分なし）であるか、または目的語自体に「焦点（focus）」が置かれている場合である。

(61) Ο Γιάννης την αγαπάει τη Μαρία.

the Yannis f.3.sg.acc. love-sg.3 the Maria

「マリアを愛しているのはヤニスだ」（『ヤニス』または『愛する』に強勢）

(62) Ο Γιάννης  $\emptyset$  αγαπάει τη Μαρία.

the Yannis love-sg.3 the Maria

「ヤニスはマリアを愛している」（『無色』な文） または

「ヤニスが愛しているのはマリアだ」（『マリア』に強勢）

この2例を比較すると、目的語重叙の状態から弱形人称代名詞が除かれることで、あたかも目的語が文の中で「際立ってくる」<sup>55</sup>様に見える。

### 1.3.6.1.2. 関係代名詞の重叙

次に、関係詞に対する重叙現象に限って見ると、先行詞を伴う関係代名詞の中では語形変化しない που にしばしば重叙が見られ、語形変化する ο οποίος には目的語重叙は起こらない（属格では του を伴うことがある）。そこで、以下 που を用いた例のみ見ていくことにするが、これには大別して2種類の機能がある（Mackridge 1985: 225）。

#### ① 制限節・非制限節の区別

例(63)の様な制限節の内部に重叙代名詞を伴うことは、通常ない。これに対して(64)は非制限節の例であり、関係節内に重叙代名詞が見られる。

(63) Η γυναίκα που  $\emptyset$  είδε ο Γιάννης ήταν η μητέρα

the woman which see-aor.sg.3 the Yannis be-impf.sg.3 the woman

της κοπέλας.

<sup>55</sup> 「際立った（prominent）」という表現は、談話分析における「焦点」「新情報」の別な呼び方で用いられることがある。詳しくは福地（1985）。

the girl-gen.

「ヤニスが会った女性はその少女の母だった」

- (64) Η Μαρία, που την είδε ο Γιάννης, ήταν  
the woman which f.3.sg.acc. see-aor.sg.3 the Yannis be-impf.sg.3  
η μητέρα της κοπέλας.  
the woman the girl-gen.

「マリアはヤニスが会った人だが、彼女はその少女の母だった」

## ②統語的機能の判別

これは「制限節・非制限節の区別」に優先する機能である。

- (65) (関係代名詞の先行詞が関係節内で主語となる場合)

Ο άντρας που σκότωσε το παιδί.  
the man which kill-aor.sg.3 the child

「子供を殺した男」

- (66) (関係代名詞の先行詞が関係節内で目的語となる場合)

Ο άντρας που του σκότωσε το παιδί.  
the man which m.3.sg.acc. kill-aor.sg.3 the child

「子供が殺した男」

(65)では主格・対格同形の το παιδί「子供」が主語か目的語か（要するに『殺された』のか『誰かを殺した』のか）見分けにくく、「男」が関係節内で目的語なのか主語なのかもはっきりしなくなる。そこで(66)の様に「男」を指す που が関係節内で目的語として用いられる場合には、それに呼応する対格の代名詞 του が出てくるのである。ここでは直接目的語の場合を主にしているが、間接目的語の場合もこうした重叙代名詞が義務的に現れる<sup>56</sup>。

---

<sup>56</sup> του の先行詞が関係節内で間接目的語として用いられている例には、次の様なものがある (Mackridge 1985, 249)。

Ο άνθρωπος που του δάνεισα τα λεφτά είναι ο θεός μου.

### 1.3.6.2. マケドニア語及びブルガリア語

ブルガリア語の関係代名詞には、語形変化する *който*<sup>57</sup> と、変化しない *що* がある (Стоянов1984, 300-301 及び Мирчев1963, 168-169) が、筆者が調べた限り、これらに対して重叙代名詞が現れる例は見られない。特に *що* は、主格以外で用いられること自体が相対的に少ない。

(67) Искам ли този чай, който Таро е доесял от Япония?  
have-sg.2 (interrogative) this tea which-m.sg. bring-pf.m.sg.3 from Japan  
「太郎が日本から持ってきた茶はあるかい？」

(68) Това е другарят, накогото е дължим благодарност.  
this be-sg.3 comrade-df.sg.nom. to whom be indebted-pl.1 thanks  
「こちらは私達がお世話になっている方です」

(69) Направи, що можеш!  
do-imp.sg.2 [that]which can-sg.2  
「できることをしなさい」(先行詞なし)

これに対してマケドニア語では一般に *што* が用いられ、関係詞で導かれる語が関係節中で目的語となる場合は常に重叙する。語形変化する *кој* (指示代名詞と同形) と *што* の複合形 *којшто* は、前置詞を伴う関係詞の場合、また *што* のみでは統語的關係 (特に先行詞の性・数) が曖昧になる様な場合に用いられる (Lunt 1952: 44-45 及び Војиќ/ Oschlies 1984: 56-59)。従って *којшто* における重叙の条件は *што* の場合と同様だと言えよう。この点、同じ南スラヴ語であるブルガリア語の *който* と *що* の関係とは明らかに異なる。

---

the person which m.3.sg.dat. loan-aor.sg.3 money-pl. be-sg. 3 uncle my  
(=... στον οποίο δάνεισα ...) 「(彼に) 金を貸した人は私の叔父だ」  
to+whom loan-aor.sg.3

この場合、属格代名詞が関係節中で重叙代名詞として用いられている。  
<sup>57</sup>基本的に全ての格で *който* が用いられる。対格形 *кого*то 与格形 *кому*то は主に文章語で、先行詞が人間を示す男性名詞である時にのみ用いられる。

(70) Детето што го сртнавме е синот  
 child-df.sg.nom. that 3.f.sg.acc. meet-pret.pl.1 be-sg.3 son-df.sg.nom.  
 на мојот другар.  
 of my-df. friend

「我々が（その子に）会った子は友達の息子だ」

(71) оваа земја, накоја и даде свој личен печат  
 this world to whom 3.f.sg.dat. give-past.sg.3 own personal seal

「彼が（そこに）自分の個人的印象を与えた世間」

### 1.3.6.3. ルーマニア語

ルーマニア語の関係代名詞には、語形変化する *care*、そして語形変化するが主格と対格で同形の *ce* がある (Beyrer/ Bochmann/ Bronsert 1987: 119-121)。関係詞としての *ce* は主格と対格にしか用いられないので、事実上不変化と言える<sup>58</sup>。関係節内で重叙を伴うのは常に *care* で、これは義務的である。

(72) Am un vecin pe care<sup>59</sup> îl văd în fiecare zi.  
 have-sg.1 one neighbour which-acc. 3-m.sg.acc. see-sg.1 in every day  
 「私には毎日（その人に）会う隣人がいる」

これに対して *ce* は重叙を生じない。

(73) Aseară mi- a împrumutat roata ce i-ø am cerut.  
 last night me loan-pf.sg.3 wheel-indf. that him request-pf.sg.1  
 「彼は昨晚、私が欲しがっていた車輪を貸してくれた」

### 1.3.6.4. バルカン諸言語の関係節構造と重叙

1.3.6.1.から 1.3.6.3.までを踏まえ、各言語の関係代名詞と重叙との関係を整理してみよう (表 9)。

<sup>58</sup>話し言葉では、しばしば *ce* が前置詞 *de* を用いた構文に置き換えられる。

<sup>59</sup>ルーマニア語における *pe*+目的語の構造は重叙現象と関連しているが、これについては 2.1.3.4.で述べる。

表 9

	アルバニア語	ルーマニア語	ブルガリア語	マケドニア語	現代ギリシア語
屈折型	i cili (++)	care (++)	който ( - )	којшто (++)	ο οποίος ( - )
非屈折型	që ( + )	ce ( - )	що ( - )	што (++)	που ( + )

(++ ; 義務的に重叙 + ; 任意的に重叙 - ; 重叙しない)

この表についてはいくつか注意すべき点がある。まず、この分類表は統語構造のみに依拠して作成されており、個々の文例の関係節における意味内容の差異は考慮されていない。またここで示されているのは直接目的語の場合であり、間接目的語となる場合には内容が若干異なる。例えば（きわめて稀だが）アルバニア語の *që* に対する代名詞重叙は、与格では義務的である。更にブルガリア語の *що* やマケドニア語の *којшто* の様に用例が比較的少ないものについては、例外が皆無とは言えず、重叙の有無を完璧に二分することはできない。各言語間の重叙の度合は、あくまで相対的なものとする方が賢明である。

目的語重叙も含めたバルカン共通の言語現象（定形語尾、不定詞の消失など）全般について見ると、それらが現れる頻度の高さはほぼ アルバニア語 > マケドニア語 > ブルガリア語 > ルーマニア語 > 現代ギリシア語 > セルビア語 の順になるという指摘がある（寺島 1991: 116）。また重叙現象の頻度に限った場合、セルビア語を除く 5 言語の中でアルバニア語（与格において義務的に重叙）が依然上位に留まり、これとほぼ同様のルーマニア語とマケドニア語が同列に並び、次いでブルガリア語、現代ギリシア語の順となる。

では関係節における重叙についてはどのような特徴があるだろうか。表 9 で見る限り、5 つの言語はその傾向によって大きく 3 つのグループに分けられる。

①第一はアルバニア語とルーマニア語で、これらは屈折型において重叙現

象が義務的であるという点で共通している<sup>60</sup>。

②第二はブルガリア語とマケドニア語である。ブルガリア語では関係代名詞の重叙そのものが全くと言ってよい程見られず、一方マケドニア語では関係節の種類にかかわらずほぼ重叙が生じている。この様に重叙の有無は正反対であるが、屈折型と非屈折型で重叙の傾向に事実上差がないという点では共通している（このことを視覚的に示す為、この両言語のみ上下の項目が仕切られていない）。

③第三は現代ギリシア語で、非屈折型でのみ重叙が起こり得る。

同じ南スラヴ語であるマケドニア語とブルガリア語とで、関係節内における重叙の有無に明らかな相違があるのは注目すべきことである。そもそもマケドニア語は、ブルガリア語よりもバルカニズムの傾向が強く、隣接するアルバニア語との相互影響の可能性が考えられるのだが、今回の結果にもそうした傾向の一端が垣間見える。

更に興味深いのは、第一のグループと第三のグループとで正反対の傾向が見られることである。現代ギリシア語の非屈折型  $\pi\omicron\upsilon$  が重叙代名詞を伴い得る理由については、1.3.6.1.2.で述べた通りでよいと考えられるが、アルバニア語とルーマニア語の場合、むしろ屈折型使用の際に重叙が求められている様に見える。

これについては、まず第一グループの両言語においてはもともと目的語重叙という現象の頻度が高いので、特に *resumptive pronoun* である関係詞

---

<sup>60</sup> これとよく似た使い分けを次のチェコ語の例にも見ることができる。関係代名詞 *co* と *který* は共に語形変化するが、*co* は主格と対格において同形である（Keenan 1985: 151）。

(a) Jan viděl toho muže, co ho to děvče uhodilo.  
see-pret. that man which him that girl hit-pret.sg.3

(b) Jan viděl toho muže, kterého  $\emptyset$  to děvče uhodilo.  
see-pret. that man which-m.sg.acc. that girl hit-pret. sg.3

「ヤンは、その女性が殴った（ところの）男を見た」

の重叙代名詞についてはそれが常用化し、もはや有標性を持たなくなっているのではないか、ということが考えられる。しかもルーマニア語では、1.3.6.3.で述べた様に非屈折型 **ce** の選択基準が著しく制限されており、現代ギリシア語の様に統語関係の判別という理由から重叙する必要性も低い。稀少例の存在は考えられるものの、全般的には **care** と **ce** の使い分けが十分に為されていることで、「重叙し得る屈折型」と「重叙しない非屈折型」への二極化が起こっているのではないだろうか。

ただ、アルバニア語についてはこうした解釈も十分なものではない。非屈折型 **që** における重叙の問題については、ルーマニア語の **ce** とほぼ同じく主語及び直接目的語としての場合に用法が制限されていながら、重叙の傾向が **ce** の場合と一致しない。これについては、ギリシア語の場合に見られた制限節・非制限節の区別や、関係節の意味内容が関与している可能性もある。以上の問題については、第2章で詳しく検討する。